

# 見世物の興行について

鵜飼 正樹

## 1 日本の見世物：歴史と現状

かつて、祭りや縁日には、小屋掛けの見世物小屋がつきものだった時代があった。これら仮設興行は、「大荷」（サーカス）、「中荷」（ヤブ）、そして、見世物のような「コモノ」に3分類できる。日本仮設興行協同組合の『組合員名簿』をたどってみれば、昭和33年1月現在には、38本もの「コモノ」があり、ハレの場で芸を披露し、全国を興行していた。しかし、現在、日本の見世物は風前のともしびと言って良い状況にある。すべてを自前で興行できる「コモノ」の団体はわずかにひとつしかない。太夫（芸人）や絵看板類を融通しあって興行できる団体も、今は、たったひとつという現状である。本報告では、見世物興行の世界で、重要なが見落とされやすい一側面、すなわち、太夫の芸そのものではなく、いかに見世物を演出しているかという点について考えてみたい。

## 2 見世物をめぐる二つの芸

見世物と言えば、何が見世物にされたか、つまり、小屋の中で見世物に供せられたものや人のことを、まず思い浮かべることが多いと思う。観客は、熟練した太夫の芸を何より楽しんでいたのである。このジャンルの体系的な先行文献、朝倉無声『見世物研究』によれば、芸は技術類、天然奇物類、細工類があるという。また、「コモノ」業界では、「因果もの」と「ネタもの」に分類されていた。しかし、見世物の興行にとっては、どのように見世物を演出しているかということも、非常に重要である。と言うのも、まずは小屋の中に客を呼び込むことから、見世物は始まるからである。そして、この点において、見世物の世界には、様々な技術があり、絶妙な工夫を凝らしてきた。たとえば、小屋の外の芸としては、木戸番（シンウチ）の話芸「タンカ」などが重要な要素となる。

## 3 見世物の興行：「見世物」を見せる

見世物小屋を集客装置と考えた場合、小屋の構造、絵看板、呼び込みのタンカなどが注目される。客を次々と呼び込み、そして、ゆっくり止まって見ることをないように誘導し、さらに、次々と客を押し出す小屋の構造がある。また、小屋の前を通りかかった人々の好奇心を最大限に引き出す絵看板がある。そして、何より、言葉巧みに客を小屋の中へと誘導する話芸、タンカやその場での披露の方法が重要となる。客を小屋の中へと誘導することを「コマス」と呼んでいるが、「コマス」話芸や工夫が注目される。話芸としては、客の関心を引き込み、見なければ損と思わせるために、因果や来歴が言葉巧みに披露される。また、客を急き立てるようにベルが意図的に次々と鳴らされる。そして、小屋の前に集まった人々に入りたいと思わせる、細かな工夫や技術がある。

## 4 「見られること」と「見せること」

見世物小屋の入り口では、中の様子をわずかながら垣間見ることができる。だが、当然ながら、太夫やその芸は見せられない。わずかな透き間から見ることができるのは、小屋の中で客が驚いたり、

笑ったりする姿だけである。木戸番は、絶妙のタイミングで、中の様子を見せるのである。「見ている」はずの小屋の中の客は、「見られる」対象に変換され、それが集客の誘因となっている。また、「タンカ」に出てくる因果話を類推させる、人間の後姿やものを、これまた絶妙のタイミングで、少しだけ見せ、集まった人々をさらに引き付ける。ここでは、三つの要素、「見せる」人、「見られる」人、「見る」人が巧みに置き換えられ、演出されている。結局のところ、「コマス」場面では、「見る」人にかに「見せる」かという、見世物独特の演出の技法が指摘できるのである。

#### 参考文献

鵜飼正樹（共編著）『見世物小屋の文化誌』（新宿書房）

鵜飼正樹（著）『見世物稼業：安田里美一代記』（新宿書房）